
シンポジウム

新潟県におけるリハビリテーション診療の
問題点と今後の展望

Rehabilitation in Niigata Prefecture: Present and Future

第 645 回新潟医学会

日 時 平成 20 年 11 月 15 日 (土)
場 所 新潟大学医学部 有壬記念館

司 会 遠藤直人教授 (総合リハビリテーションセンター部長)
演 者 木村慎二 (総合リハビリテーションセンター副部長), 崎村陽子 (新潟リハビリテーション病院
リハビリテーション科部長), 倉島信作 (新潟県理学療法士会相談役), 水越裕之 (新潟県作業療
法士会会長), 森田 浩 (新潟県言語聴覚士会会長), 清治智樹 (新潟医療ソーシャルワーカー協
会副会長), 若月道秀 (新潟県福祉保健部副部長)

1 新潟大学医歯学総合病院におけるリハビリテーション診療の現況と今後の展望

木村 慎二

新潟大学医歯学総合病院
総合リハビリテーションセンター

Management and Future Prospect in Rehabilitation medicine
at Niigata University Medical and Dental Hospital

Shinji KIMURA

Rehabilitation Center, Niigata University Medical and Dental Hospital

Reprint requests to: Shinji KIMURA
Rehabilitation Center
Niigata University Medical and Dental Hospital
1-754 Asahimachi - dori Chuo - ku,
Niigata 951 - 8520 Japan

別刷請求先: 〒951-8520 新潟市中央区旭町通 1-754
新潟大学医歯学総合病院 総合リハビリテーション
センター 木村慎二

要 旨

新潟大学医歯学総合病院でのリハビリテーション診療室は平成18年1月に旧西館1階の理学療法部から、新館東館2階に移転し、それに伴い「総合リハビリテーションセンター」に名称を変更した。本名称に変更した理由は旧理学療法部で行っていた身体機能及び高次脳機能障害に対するリハビリテーションに加え、呼吸リハビリと摂食嚥下リハビリを加えたことによる。平成19年度には年間延べ29,471名にリハビリ診療を行い、その数は平成13年の約2倍になっている。疾患別患者数の割合はリウマチを含む骨関節疾患が最も多く、次いで脳疾患、脊椎・脊髄疾患、神経筋疾患、廃用症候群を含めた内科的疾患、切断、小児疾患と多岐にわたる。平成19年度リハビリ延べ患者数の診療科別の割合は整形外科(35%)、神経内科(26%)、脳外科(10%)、第2内科(7%)の順番になっている。

特定機能病院である当院からのリハビリ紹介患者は近年、回復期病棟を持つ病院への転院が多くなりつつある。平成19年度では脳血管障害新潟地域連携パスの参加施設であるみどり病院への転院が26名と最も多く、こばり病院へは22名、新潟リハビリテーション病院へは20名と3病院の総数で全体の1/4を占める。

今後の展望として、新潟県唯一の大学病院として、増加しつつある患者への十分なりハビリ診療を行うため、リハビリ医を含めたりハビリスタッフを増員すること、新潟県におけるリハビリ医学の発展のため、「新潟リハビリテーション研究会」を中心に勉強会、研究会を活性化に開催すること、さらに教育の充実、研究の推進を行う必要がある。

キーワード：リハビリテーション医療 (Rehabilitation medicine)、新潟大学医歯学総合病院 (Niigata University Medical and Dental Hospital)、総合リハビリテーションセンター (Rehabilitation Center)、新潟リハビリテーション研究会 (Niigata Society for Rehabilitation medicine)

はじめに

新潟大学医学部附属病院、理学療法部は昭和50年10月に整形外科所属の理学療法室から独立し、中央診療部門として、開設以来、昭和54年4月には新潟大学病院の旧西病棟1階にリハビリ診療室、理学療法室、水治療室、作業療法室、ADL室、小児プレイルーム、言語治療室、訓練用のトイレ・風呂場が完成した。その後、現在の新潟大学医歯学総合病院、総合リハビリテーションセンターは旧理学療法部¹⁾が平成18年1月に東館2階に移転し、それと同時に名称を変更した。以前まで備えていた理学療法 (PT) 室、作業療法 (OT) 室、言語聴覚 (ST) 室に加え、摂食嚥下リハビリ室と呼吸リハビリ室を併設し、総床面積は704m²と国立大学法人附属病院の中でも広いリハビリ室となっている。

新潟県内で唯一の医・歯学部の附属病院である

当院の総合リハビリテーションセンターは新潟県におけるリハビリテーション医療の発展、さらにリハビリテーション医療に関係する人材育成、リハビリテーション医のレベルアップを図っていく必要がある。そこで、新潟大学医歯学総合病院総合リハビリテーションセンターの現況と今後の展望について報告する。

新潟大学医歯学総合病院

総合リハビリテーションセンターの診療概要

平成19年度の総合リハビリテーションセンターでのリハビリ施行患者数は1か月平均2,456名で、年間延べ29,471名にのぼる。年度毎のリハビリ施行患者数の推移をみると平成13年度は15,899名だったのに対して、平成19年度は約2倍に増加している。平成19年度の疾患別患者数ではリウマチを含む骨関節疾患が409名、脳卒中

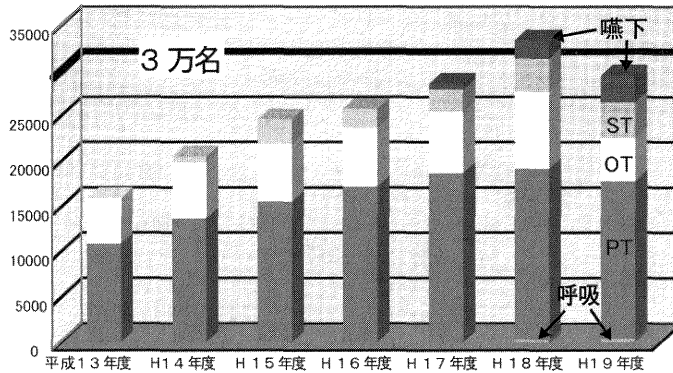


図1 リハビリ延べ患者数の年度別推移

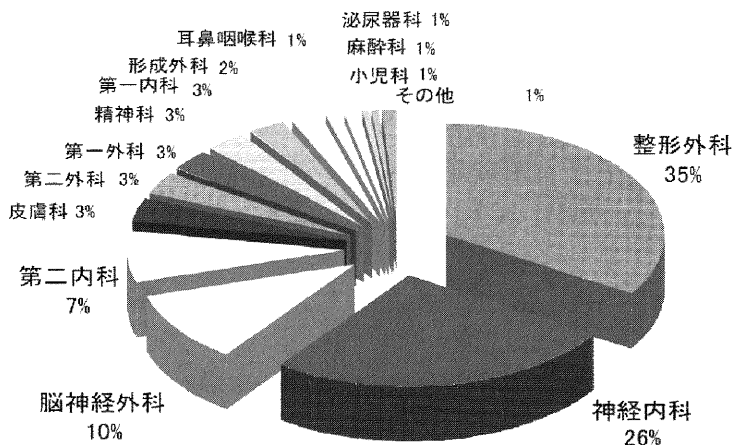


図2 平成19年度リハビリ延べ患者数の各診療科別割合

とその他の脳疾患・脳外傷が107名、脊髄損傷とその他の脊椎・脊髄疾患²⁾が107名、神経筋疾患が92名、呼吸・循環器疾患が69名、脳性麻痺を含む小児疾患が9名、切断が6名、その他が210名となっている。平成18年から、新たに開始した呼吸リハビリ患者も平成19年度では420名、平成17年から開始した摂食嚥下リハビリ患者は平成19年度には2,969名となり、両方のリハビリ共に増加の一途をたどっている。平成18年度に比して、平成19年度の患者数が減った理由は作業療法士が4名から2名に減員したこと、さらに

理学療法士1名が年度途中で退職したことによる(図1)。

また、院内の各診療科の平成19年度リハビリ施行延べ患者数の割合を図2に示す。最も多い科は整形外科で35%を占め、以下、神経内科26%、脳外科10%、第2内科7%の順となっている。その他の科からの割合は少ないものの、院内のほぼ全診療科からの依頼を受けていることが特徴である。

医師スタッフとして、平成18年4月からは常勤リハビリ医が1名に減員したため、同時期より、

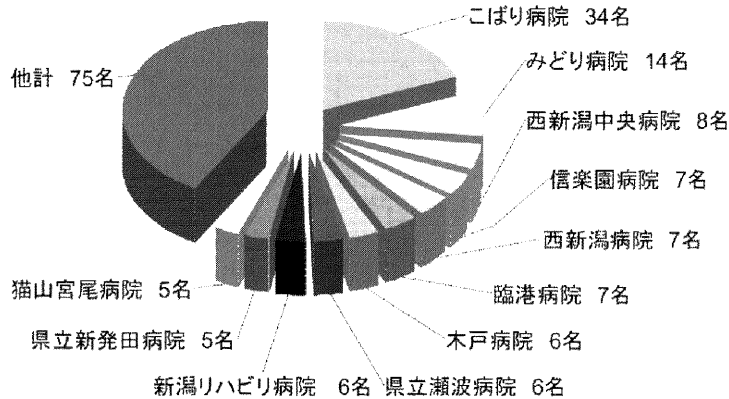


図3 平成17年度の病院別リハビリ転院患者数

臨床経験豊富なりハビリ専門医を特任准教授として学外から採用し、日々の診療を援助していただいている。週に半日程度で脳疾患患者を中心として診察していただき、リハビリゴール、リハビリアプローチ、補装具の選定などのアドバイスを受けている。また、平成18年1月からは看護師長が地域保健医療推進部との兼任で、当センターに配属されている。これにより、医療的処置(酸素吸入、気管内分泌物の吸引、点滴、フォーレの管理、バイタルサインの確認等)の必要な患者のリハビリセンターでのリハビリが可能になっている。また、リハビリ患者の増加に対応すべく、平成20年度からは言語聴覚士2名を増員し、理学療法士7名、作業療法士4名、言語聴覚士4名体制になっている。さらにリハビリセンター内のスタッフとして、摂食嚥下リハビリ部門の非常勤歯科医5名、呼吸リハビリ部門の非常勤内科医4名も参加している。

特定機能病院としての当院から他院への リハビリ転院患者の動向

当院は特定機能病院として、県内外からの紹介患者を受け入れ、急性期医療および難治性疾患の診断、初期治療を行った後に他院へ逆紹介することがその役割である。リハビリテーション診療に

においてもその役割を担っている。

平成17年度には古くからの関連施設であるこばり病院への転院が34名と最も多く、続いてみどり病院14名、西新潟中央病院8名となっていた(図3)。平成18年度にはこばり病院への転院が33名、みどり病院への紹介数が増加し、24名となり、続いて佐渡総合病院(10名)、信楽園病院(10名)となっていた(図4)。平成19年度には脳血管障害の紹介患者の増加に伴い、回復期病棟³⁾を充実したみどり病院が1位となり、26名の紹介を行った。2位のこばり病院は23名と減少し、3位にはやはり回復期病棟を持っている新潟リハビリテーション病院が増加し、20名となった。平成19年度には県内外のあらゆる病院へ紹介している(図5)。しかし、これらのデータはあくまでも、当院でリハビリテーションを施行し、転院先でもリハビリの継続が必要なため、紹介状を作成した患者数を示し、リハビリが主な転院の目的とは限らない。

さらに各転院先病院の年次別転院患者数の推移を図6に示す。みどり病院や新潟リハビリ病院のような回復期病棟を充実した病院の転院患者数が年々増加している。信楽園病院へは透析とリハビリの両者とも必要な患者の転院が増加している。

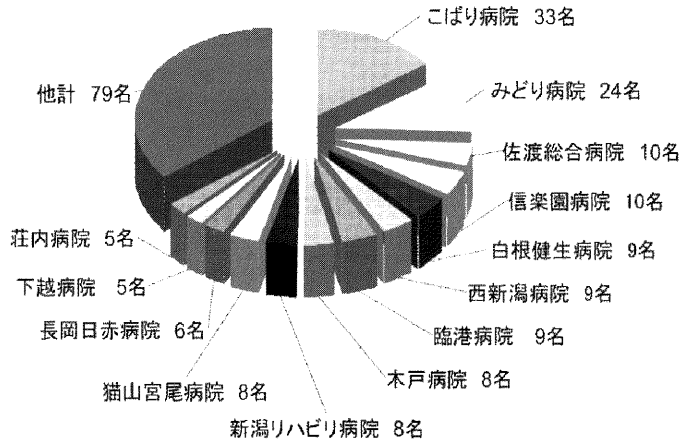


図4 平成18年度の病院別リハビリ転院患者数

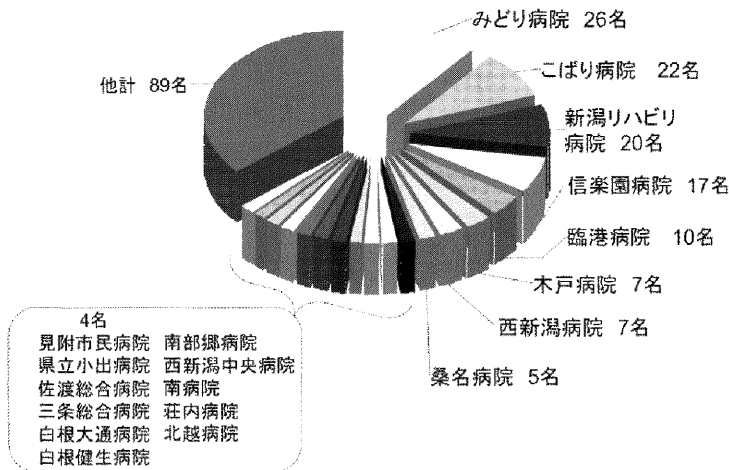


図5 平成19年度の病院別リハビリ転院患者数

今後の展望

1. リハビリ医を含むリハビリスタッフの増員

平成21年10月の救命救急センターの開設に伴い、リハビリ対象患者の増加が予想される。三次救急対応に伴い、四肢の骨折などを含めた多発外傷や、脳卒中などの患者の増加が予想されることから、リハビリスタッフの増員を要望していく予

定である。リハビリスタッフの充実と早期からのリハビリテーション介入⁴⁾は急性期病院の在院日数の短縮に寄与すると考えられる⁵⁾。

2. 新潟県におけるリハビリテーション医学の発展

当院の総合リハビリテーションセンター内には新潟リハビリテーション研究会 (<http://www.med.niigata-u.ac.jp/reh/index.html>) の事務局が

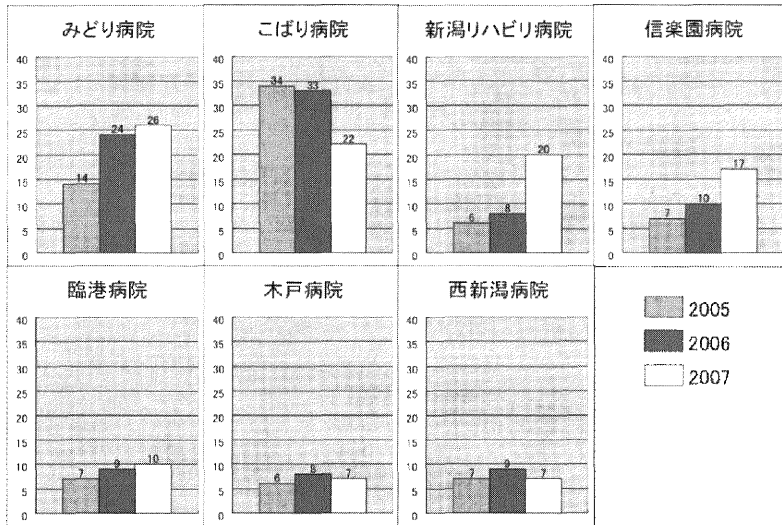


図6 各転院先病院の年度別リハビリ転院患者数

あり、専任の秘書が週2日勤務している。県内外の各種シンポジウム、勉強会（原則第一月曜日の午後7時から、みどり病院にて開催）、研究会（年1回10月に開催、平成21年は10月24日（土）の午後から開催予定）の企画、運営を当事務局で行っている。特に平成20年に、「新潟リハビリテーション研究会」は会発足10周年を迎え、記念誌の発刊を計画しており、現在各会員から原稿を収集中である。

3. 教育、研究の推進

当院は県内唯一の大学医・歯学部附属病院であり、優れた医療人を育てる教育機関でもある。医学部学部生、前期、後期研修医、及びリハビリ療法士の研修を積極的に受け入れる必要がある。また、リハビリ関連の地方会や全国の学会に向けての学会発表、さらには論文として発信していく必

要がある。

引用文献

- 1) 大澤治章, 丸山孝子: 大学病院におけるリハビリテーション. 新潟医学会雑誌 117: 14-15, 2003.
- 2) 木村慎二: 脊椎変性疾患の治療—リハビリテーションと手術療法—. 新潟医学会雑誌 120: 622-628, 2007.
- 3) 山岸 豪, 宮下宏子, 小林雅子, 村沢 章: 回復期リハビリテーション病棟. 新潟医学会雑誌 117: 8-9, 2003.
- 4) 木村慎二: 腰部脊柱管狭窄症の患者指導のコツ「術後の病棟リハビリテーションのコツ」. 整形外科看護 13-7: 51-59, 2008.
- 5) 崎村陽子: 急性期および慢性期リハビリテーション. 新潟医学会雑誌 117: 2-7, 2003.